



ゆかりが深い岩手のみなさんに読んでほしい 「降伏の時」小暮聡子さんインタビュー

新刊『降伏の時 元釜石捕虜収容所長から孫への遺言』は、祖父と孫の「共著」という形で出版されました。ニューズウィーク日本版記者として活躍し、戦争に関する特集を手がけている小暮聡子さんにお話を伺いました。

4月17日に釜石市で行われた講演会では稲木誠さんの母校、旧制一関一中（現一関高校）の後輩に当たる方も参加され、エールまで飛び出しました。

小暮聡子さん 祖父は旧制一関中を卒業しており、祖父の父は遠野市出身です。ゆかりが深い岩手の人たちに読んでほしいとの思いでつくった本でしたので、本当にうれしかったです。

「稲木さんの手記『降伏の時』を初めて読んだのはいつころですか？」

小暮さん 大学4年生の時ですね。祖父の姉と一緒に、それこそ遺品をひっくり返すように探したら原稿が出てきました。その頃の私は既に捕虜に関する本をいろいろ読んでいました

が、捕虜収容所の所長が書いた手記というのは初めてでした。祖父が書き残したもののなかでは一番面白いと思いました。

「稲木さんの手記はとても客観的で、終戦直後の貴重な記録です。」

小暮さん 祖父は細かい字でびっしりと当時のことを記録していました。一般の人は自分の記憶を頼って書きますが、祖父は元記者としてファクト（事実）を大事にしていました。そこが他にはないものだと思います。

「『降伏の時』が初めて読んだ稲木さんの作品だったので何か？」

小暮さん 一番最初に読んだのは、私が高校2年生の時に母

から勧められた回想録「ブックさんからの手紙」でした。A級戦犯という言葉は知っていましたが、祖父が戦犯だったこということを知り、すごくショックだったことを覚えています。戦犯にB級C級があるなんてそもそも知らず、私は英語が好きだったこともあり、アメリカが祖父を戦犯として裁いたことと、優しかった祖父がどうしても結びつきませんでした。

「本書で一番伝えたかったことは？」

小暮さん この本は祖父の汚名をそそぐためにつくった本ではありませんし、私自身もそういうことをやっているつもりはありません。祖父は1982年に『巣鴨プリズン二〇〇〇日』を出版した際、特に若い人たちに読んでほしいと新聞社の取材に答えています。一個人ではなく、記者として書き残した「若い世代への遺言」ではないかと思っています。

「ロシアのウクライナ侵攻は

世界中に衝撃を与えました。第二次世界大戦が遠い過去の出来事ではないことを多くの日本人が実感したとも言えます。」

小暮さん メディアが間違っていると戦争が起り得ます。この先、第二次大戦を直接知っているメディア人がいなくなったら、私たちの世代が次の世代にどう伝えていくのか、本当に大事なことだと思っています。

戦争を体験した世代の方々には自ら話してほしいですし、逆に若い世代の人たちは進んで聞いてほしいですね。

こぐれ さとこ

■プロフィール 小暮 聡子

1981年 栃木県宇都宮市生まれ。『ニューズウィーク日本版』（株・CCCメディアハウス）記者／編集者。2004年立教大学法学部政治学科卒、2007年英サセックス大学大学院にて「現代の戦争と平和学」修士号を取得。2007年に入社、2012年～2018年の米ニューヨーク支局を経て現在、東京本社勤務。

書店員さんレビュー

坂嶋竜 さん
さわや書店イオンタウン釜石店

僕らが住むこの街でかつてどんな出来事があったのかということ、特に今このような状況だからこそ知っておかなくてはならないのだと思い知らされた。その上でしっかりと客観的な事実で立脚して考え抜いた先にしか確かな未来は存在しないのだ、と。

そして、どんな状況であっても相手の立場を想像すること。その大前提があったうえで、たとえ国と国が戦い合った兵士同士だとしても、たとえ看守と捕虜という間柄だとしても、たとえ異なる国で生まれ育ったとしても、僕らは手を取り合うことができる。かつてこの街を発端に発生したいくつかのささやかな奇跡は、まだ世界に絶望するのは早いのだと教えてくれる。（坂嶋さんは2019年、「誰がめたにルビを振る」でメフィスト評論賞賞月賞受賞）